

武蔵野日曜集会 復活節

復活のキリスト

――ルカ伝第24章1～43節――

1996年4月7日

小池辰雄

投げ入れ 烈々たる生命 霊肉渾然 神交 道は歩かなければ 響きに共感 愛の献げもの
私が書いた 壺を毀ちて 小さな集会 新天新地 遺りもの 風の吹くがごとし 遍照遍在

【ルカ24】

1 一週^{まわりはじめ}の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料^{たふさぎ}を携えて墓にゆく。²然^{しか}るに石の既に墓より転^{まうは}し除けあるを見、³内に入りたるに、主イエスの屍体^{しかばね}を見ず、⁴これが為^{ため}に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣^きを著^きたる二人の人その傍^{かたわ}らに立てり。⁵女たち懼^{おそ}れて面^{おもて}を地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶彼は此処^{いま}に在さず、甦^{おも}えり給えり。尚^{なほ}ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶^{おも}い出でよ。⁷即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^{わた}され、十字架につけられ、かつ三日めに甦^{おも}えるべし」と言い給えり』⁸ここに彼らその御言^{おも}を憶い出で、⁹墓より歸りて、凡^{すべ}て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒^{たわごと}たちに告げたり。¹¹使徒^{かた}たちは其の言^{ことば}を妄語^{たわごと}と思ひて信ぜず。¹²「ペテロは起^たちて墓に走りゆき、屈^{かが}みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」

¹³視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶されど彼らの目遮^さえられて、イエスたるを認むること能わず。¹⁷イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言^{ことば}は何ぞや』かれら悲しげなる状^{さま}にて立ち止り、¹⁸その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』¹⁹イエス言い給う『如何^{いか}なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、²⁰祭司長ら及び我が司^{つかさ}らは、死罪に定めんとて之^をを付^{わた}し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、



この人なりと望みいたり、然しかのみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女あるたち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝あさ風墓に往きたるに、²³屍しかばね体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩ともがらの数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき。²⁵イエス言い給う『あおろか愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍おろき者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難くるしみを受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷かくてモ―セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就つきて凡ての聖書に録しるしたる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入すなわりたもう。³⁰共に食事の席に著つきたもう時、パンを取りて祝し、擘さきて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えざり給う。³²かれら互に言う『途みちにて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕ともなる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦よみがえりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘さき給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷と云い給う。³⁸かれら怖おそじ懼おそれて、見る所のものを霊うたがならんと思ひしに、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫なでて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰『斯かく言いて手と足とを示し給う』⁴¹かれら歡喜よろこびの余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此こ処に何か食物あるか』⁴²かれら炙あぶりたる魚ひとさ一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

● 投げ入れ

今日は復活節という特別の日です。もう私は本当は言葉がない。どういように告白すべきですかね。私は、

「主さま、キリストさまー！」

と魂の奥から音のない叫びをしながら、キリストの中に自分を投げ入れる。これが私の祈りです。言葉がない。祈り入るんです。全存在でキリストの中に自分を投げ入れる。それ
あとは

「アーメン、ハレルヤー！」

の他にはなにもない。これが私の本当の祈りです。



とにかく、イエス・キリストというかたは大変な方です。

「イエスはどういう人か？」

と問われると、私はただ

「大変な方である」

というよりか他に言いようがない。東西古今にキリストに匹敵する人はひとりもない。大変なかた、驚くべきひとです。そのイエスがヨハネ伝でも仰っているとおり、

「自分は何もできない。何も言えない。ただ神さまが言えということを言っているだけのほなしだ。神さまの力でやっているだけのほなしだ」

と。だから、私はイエスのことを

「無者」

という。日本のキリスト教の歴史で、キリストのことを無者と説いた人がいますか。おそらくないでしょうね。

「神の子」

ということばかり言っている。ところが、キリストは本当の無者なんです。自分を何者ともしてない。

「恵まれたるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

というのがそのことなんです。あれはキリストが自分自信を告白してらっしゃる。キリストにおいては、天国は神さまです。父なる神一切で、自分は何者でもない。だから、キリストのことを無者という。ところが、無者こそが無限無量者なんです。ゼロになっていると、これが無限大になる。

「ゼロ＝無限大」(0=∞)

なんです。

「私は信仰なんかありません。私は何もありません」

と、これが本当のクリスチャンなんです。「自分の信仰」なんていうものを考えているうちはだめです。キリストに圧倒されているだけです。

「私はキリストを信じてません、キリストに圧倒されています」

と、私ははつきりそう言います。

「こつち側からキリストを信ずるの信じないの」

と、そんなことではない。

どうですか、皆さん、それが本当ではないですか。ところが、昔から、

「信仰、信仰。行為ではない、信仰だ」

と言われて、信仰がサムシング（或るもの、何ものか）になっている。もうそんな信仰は私は棄ててしまったんです。キリストに圧倒されているだけのほなしで、そして生きている、生かされている。



●烈々たる生命

こんなことを言う牧師さんはいるでしょうかね。私は例外者です、世界の例外者です。はっきり言います。いずれ私はあるものを書き残して、この世を去るつもりです。武蔵野幕屋はそういう集会です。あなた方と気合が合うのはそういう世界です。もったいぶったことは、私は大嫌いだ。

キリストに圧倒されると、上から力がきてしようがない、光が来てしようがない、生命が来てしようがない。そういう世界です。ありがたくてしようがない。私はしようがない野郎です。

92歳にもなつてなぜ元気かというと、なにも自分の元気ではない。何歳になろうと、上から来る力に圧倒されて生きています。もう年齢なんか問題ではない。今までの無教会の先生方で90歳でもって伝道した人がいるかというと、いないんです。大体70か80歳台でおしまいになっている。

なにも歳のことを言っているのではない。私はおそらく100歳を突破するでしょう。そんなことはどうでもいい。永遠の生命をいただいているから、明日たおれてもいい。

死にません、次の世界に往くだけのことはなしです。「往生」というのは往きて生きると書く。

「小池は死んだ」

なんて絶対に言わないでもらいたい。私がこの世を去ったら、

「先生は往生した」

と言ってください。

「どうもありがとう」

と、向こうから感謝の言葉を吐きます。そういう烈々たる生命がキリストなんです。

だから、私はイエスを信じてなんかいない。キリストの中に自分を投げ入れている。

「主さまー」

の一言だけです。皆さんもそういう気合で進んでくださいね。

どうですか、楽しくありませんか。私は楽しくてしようがない。ありがたくてしようがない、楽しくてしようがない、楽しくてしようがない。しようがない人間なんだ。だから、力が来てしようがない。

我々は死にませんよ、次の世界に往く。

「死とは隣の部屋に行くようなものだ」

とはヒルティーが言った言葉です。彼はおとなしい優しいような方だけれども、あれが烈々たる魂なんだ。彼は教会に行かない。まさに無教会だ。ヒルティーの『眠られぬ夜のために』という本を読んでごらんさい。



●霊肉渾然

「武蔵野幕屋」はそういう幕屋なんです。旧約から新約にいたるまで「幕屋」という。幕を張りながら旅をする。あれはいい言葉だ。英語では「タバナクル」、ドイツ語では「ガイステイゲ・ヒュッテ」という。

「復活」というと、

「また生き返った」

なんて思うが、生き返ったではない。復活という言葉は本当は、キリストにはいらない言葉なんだ。復活のキリストは烈々たる、霊肉渾然こんぜんたるキリストです。地上にあつたよりもっと凄い現実なんです。霊肉渾然たるキリストがこの復活のキリストなんです。だから、

「何か食べる物があれば食べるぞ」

と言って、食べたでしょ。ルカ伝の終りの方に書いてある。復活のキリストが魚を食べた。幽霊かと思ったら、そうではない。

「私に触ってみろ」

と、キリストは手と足を出した。キリストの復活体というのは空前絶後の現実です。誰も真似はできない。それで今でも霊界に生きておられる。

「主さまー」といえば、キリストは応えてくださる。私は

「主さまー」

と言うと、もうそれでキリストの中に飛び込むから、グーッと力がくる。本当ですよ。だから、疲れをしない。何かお願いすることが祈りではない。自分を投げ入れることが祈りなんです。投げ入れてから、それから何でもお願いしてください。そのお願いはもう私のお願いではなくなる。

●神交

そんな現実、私が無教会にいた時に誰も言わなかった。誰からも教わらなかった。

「信仰、信仰」

というばかりで。「しんこう」という言葉がそんなに好きなら、「神交」と書いたらいい。信じ仰ぐのではない。神・キリストとの交わり、これが本当の神交です。霊が一つになる、一如の世界です。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言った、あの現実です。相手に相對しているのではなく、一つになってしまっている。

「我を見し者はキリストを見しなり」

とあなた方は言えなくてはだめなんだ。

「随分、お前は傲慢なやつだな」



なんて言われるかも知れない。傲慢ではない。自分がいないから、キリストだけが本当に生きている。

「わがうちなるキリストが見えませんか」
と言ったらしい。

「復活」という言葉は本当はあわない。霊肉渾然たる姿で顕れてきたのが、これがキリストの霊肉渾然たる顕現なんです。十字架にかかれる前のキリストよりも、十字架にかかって顕れてきたキリストの方がもつと凄いんだ。

●道は歩かなければ

聖書くらい楽しい本はない。皆さん、毎日ご飯を食べるように聖書を食べてますか。聖書を読まなければ眠られないというのが本当なんです。どんな小説よりも、どんな文学よりも、聖書は最大の文学です。ゲーテが「書中の書」と言った。あらゆる本のうちのただ一つの本です。「歌中の歌」という言葉がある。旧約聖書の雅歌書がそうです。

万巻の書を失っても聖書一卷あればたくさんだ。電車の中でもどこでも読んでいければいい。楽しくてしょうがない。ひとつの聖書を破って分冊にして、ポケットに入れて電車の中で読んだらいい。それくらいの気合がなければだめですよ。私は実際にそれをやった。皆さんも本当にキリストに在ると、一人びとりが例外者になりますよ。例外者にならないければだめなんです、ひと真似のような似たような存在では。一人びとりが天下一品でなければ。本当の人間というのはみな天下一品なんです。指紋はみな違う。神さまは同じものをつくらない。神さまは最大の芸術家だ。

芸術でなくて本当は芸道なんだ。道なんだ。キリスト教ではない。キリスト道です。私はあの「教」の字は嫌いだ。教えかと思つて、一生懸命で頭で考える。頭で考えたらおしまいです。道は歩かなければわからない。全存在で生活しなければ、道はわからない。だから、道者でなくては。

老子は「無道の道」ということを言った。あれは本当です。老子というのはえらい。孔子よりか老子のほうがえらい。孔子は老子を見て

「あれは竜のごとき存在だ」

と言ったという。孔子は老子の前には頭があがらなかった。竜というのはシナでは霊獣なんです。

●響きに共感

「キリストは復活したかどうか」

なんていうことは問題でない。彼は甦えらざるを得ない。次の霊肉渾然たる存在に展開せざるを得ない。そういう方です。聖書に書いてなくても、それが洞察できるようなのが本



当のキリストを知っている人になる。エックハルトは言いました、

「神さまなんか説明のできるものではない。また、人間の側から分かるものではない。分からないものが本当の神さまだ」

と。さすがはエックハルトだ。言葉で説明のできるものは大したものではない。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼^{おおぞら}はその手のわざをしめす。この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。語らずいわずその声きこえざるにそのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ。」(詩篇19・1～4)

という世界です。

私は自分でもって感激しているから、話が話にならない。論理的にものを頭で考えて言っているうちは、人の魂なんか動かない。そうでしょ。何か知らんけれども、私の言葉の響きにあなた方は共感していらつしやると思いますがね。共感しなかつたら、しない方がわるい(笑)。もったいぶった説教なんかできるかというんだ、冗談じゃない。私は、あなた方がそういう霊のお友だちだから、この集会は楽しくてしようがない。日曜の集会ほど楽しいものはない。もし楽しくなかつたら出ていってください。一向差し支えないから。ああ、みな楽しそうだな(笑)。

楽しいということが一番本ものだということですよ。勉強していても、ああこの勉強は楽しくてしようがないと。楽しくなければね。先生が言うのに

「あなた方、勉強しなさい」

ではだめなんだ。

「勉強は楽しいねえ」

と先生が生徒を信じてそう言わなければだめなんだ。

「すべし、すべからず」

は律法の世界。

「こうだねえ」

と言って、現実を信じてかかって言うのが本当の福音の世界です。

「ああ、そうでしたか。それはこつちがまだ楽しみが足りませんでした」

と。もしそうだったら、遠慮なくそう言って、大いに楽しい世界に入ってくださいよ。

●愛の献げもの

ベタニヤのある女がキリストにナルドの香油を注いだ。あれはキリストはとても喜ばれた。ベタニヤのある女が――キリストに七つの悪鬼を追い出されて救われた女性です――感謝の気持からでしょうね、やがてイエスはあちら側にいらつしやるといので、ナルドの香油をキリストに注いで、葬りの備えをした。キリストは、



「この女のしたことは福音の宣べ伝えられる所、世界中どこでも伝えられなければならない」

と言われた。本当の愛の献げものです。彼女自身が香油になったわけですから。愛は最大の力です。

「敵をも愛せよ」

とキリストは言われた。「愛する」というのは、相手を救ってしまふことです。敵がない。天下無敵ということは、

「敵なんかありません。どこ人であろうと、どういう人であろうと、みな自分の友だちです、兄弟姉妹です」

ということ。それが本当に突き抜けた愛の世界です。こっち側は、何と思われようといひ。どう扱われようといひ。

「こちらは愛そのものです」

ということ。そういう愛にはかなわない。

人間は大体、相対的な現実の判断をしている。相対的現実の判断をしているうちはだめなんだ、絶対の世界に入らないと。あなた方はどう扱われようと、どう思われようと、

「私の中にはキリストの愛が流れているんです」

と、そういう人物にどんどんなつてくださいよ。こんな楽しいことはない。こんな楽なことではない。こんな力強いことはない。

キリストはナルドの香油を注がれて、こんな嬉しいことはないと言って、

「全世界、何処^{いずこ}にても、福音の宣べ伝えらるる処には、この女の為しし事も記

念として語らるべし」(マルコ14・9)

と言われた。私はああいう瞬間の言葉は本当に素晴らしいと思う。イエスという方はちつとももつたいぶらない人だ。

●私が書いた

聖書を読んでいて旧約から新約の終りまで――旧約では隠れたるキリスト、新約では露^{あらわ}なるキリスト――キリスト中心です。そのキリストは神一切なんだ。

「ゼロ＝無限大」(0＝∞)

なんだ。我々はキリストから無をたまわった。禪宗のように自分で悟って無になったのではない。無を賜った。そうしたらば、無限無量だった、ということ。です。

私は上から来ているところの力に圧倒されて告白しているだけの人はなしです。私は何者でもない。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国は――キリストが――そのうちにある」

という。あの山上の大告白の第一言は、そういうように私には響いてくる。



「恵福なるかな、霊の貧しくされた者よ。天国すなわち私がお前のうちにある」という響きです。

私は聖書をひとつ、自分の勝手な訳をつくりたいと思うくらいです。ただ文法的に間違わないような訳ばかりしたってだめなんだ、超越していなくては。書いた人が、パウロでも、

「お前は凄いい野郎だな」

と、びっくりしてしまう。パウロでもヨハネでもペテロでもみな友だちです。キリストにあつてはこれはみな友だちです。

「パウロという使徒は凄いいな」

とただ感嘆しているだけではだめなんだ。あなた方が

「このローマ書は私が書いたんですよ」

と言ったら、大したことですよ。

「パウロさんではない、私が書いたんだ」

と。それくらいパウロと一つとなったら本ものです。こんなことを言うやつはおそろくないでしょうね。仕方がない、本当だから。

●壺を毀ちて

マルコ伝14章3節から、

「イエス、ベタニヤに在^{いま}して、癩^{らい}病人シモン^{シモン}の家にて食事の席につき居給うとき、或る女、価^{まじり}高き混^{まじり}なきナルドの香油^{においあぶら}の入^いりたる石膏^{せっこう}の壺^{つぼ}を持ち来り、その壺^{つぼ}を毀^{こぼ}ちてイエスの首^{くび}に注^こぎたり。

この「壺^{つぼ}を毀^{こぼ}ちて」がいい。もうこれは使いません、あなたの他は誰にも使いませんという、この「毀^{こぼ}ちて」が素晴らしい。一回限りということ。この「毀^{こぼ}ちて」が本ものなんだ。ある人々、憤^{あやり}おりて互^{あひ}に言う『なに故^{ゆゑ}かく濫^{みだり}に油を費^{つぎ}すか、この油を二百デナリ余^{あま}に売^うりて、貧^みしき者に施^ほすことを得^えたりしものを』而^{しか}して甚^{いた}く女^をを咎^{とが}む。もつたいないと、そういう相対的な損得のことを言っている。こういう判断をするやつはみなだめなんだ。そうしたら、キリストが言われた。

イエス言い給う『その為^{ため}すに任せよ、何^{なん}ぞこの女を悩^{なや}すか、我に善^{よき}き事をなせるなり。貧^みしき者は、常に汝^{きみ}らと偕^{とも}におれば、何^{いつ}時^{とき}にても心のままに助け得^えべし、然^{しか}れど我は常に汝^{きみ}らと偕^{とも}におらず。此^{この}の女は、なし得^える限^{かぎ}りをなして、我が体^{からだ}に香油をそそぎ、預^あじめ葬^{くわ}りの備^いえをなせり。誠^{まこと}に汝^{きみ}らに告^つぐ、全世界^{いすく}何^{いづ}処^{ところ}にても、福音^{きん}の宣^{のたま}べ伝えらるる処^{ところ}には、この女の為^{ため}しし事も記念として語^{かた}らるべし』(マルコ14・3～9)

と、キリストはこんな素晴らしい預言をなさった。いかにキリストが喜ばれたか。こうい



う所を読むと、熱い涙が流れてくる。

●小さな集会

私は口語訳の聖書は読まない。文語でないとだめだ。

「何々であろう」

とか言われると、気がぬけてしまう。聖書の世界は現実の世界だから、未来形であつても現在形で書かなければだめなんだ。

「それは文法的に違います」

なんて言われたら、

「違うのが本当だ」

と言ってやる。

あなた方一人びとりは伝道者です。大いに将来やつてくださいよ。

「二、三人わが名において集まるところに我もまたあり」(マタイ18・20)

とキリストが言われた。そういう小さな集會を遠慮なく始めるといい。そして神讚美だ。讚美というのはいいことだ。我々は生活でどんな状態にあつても、神讚美、キリスト讚美を忘れたらおしまいだ。

「もう少しこの状態を良くしてください」

ではない。そのあるがままの所においてキリストを讚美してごらん。その状態は知らないまに直つてしまうから。それにうち勝つてしまうから。身体の調子の悪いのも、そういう世界に魂が入ると治つてしまう。

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

ではない。健全なる精神が、靈的¹な魂が身体を治していつてしまう。なにもお医者にかかると言っているのではない。薬を飲むなど言っているのではない。医者や薬よりもつと根源的な凄いものはキリストの力、キリストの生命なんです。なにしろ、聖書というの
は凄いね。

●ルカ伝24章

ルカ伝の24章を見ましょう。

1 一週^{まわり}の初^{はじめ}の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。²然^{しか}るに石の既に墓より転^{まろ}し除^のけあるを見、³内に入りたるに、主イエスの屍^{しかばね}体を見ず、⁴これが為^{ため}に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍^{かたわ}らに立てり。⁵女たち懼^{おそ}れて面^{おもて}を地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶彼は此処^{いま}に在さず、甦^{よみが}えり給えり。』



「甦える」というのはおもしろい字だね。「更に生きる」と書く。更に生きているわけです。

尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。⁷即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり」⁸ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマダラのマリヤ、

一番先にマダラのマリヤが出てくるのは本当に注目すべきです。これは七つの悪鬼を追いつたマダラのマリヤです。

ヨハナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。¹¹使徒たちは其の言を妄語と思ひて信ぜず。

だめだね、この使徒たちは。

¹²「ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰り」

まだ「怪しむ」くらいで、うれしがらない。

¹³視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。¹⁷イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、¹⁸その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』

とキリストに言つた。イエスはとぼけて、「どんなことだね」と言つた。

¹⁹イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、

本当は「預言者」どころではない。救い主なんだ。

²⁰祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき」²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』



もうキリストが現れて、はつきりそう仰った。「栄光に入る」というのは復活のキリストのことです。

27 かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29 強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。

彼らは目が開けてそれがイエスであることを認めた。ところが、イエスはもうその瞬間にパツと姿を消してしまった。

32 かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

おもしろいことが書いてあるな。

33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』
と言い』給う。

これはいい言霊だね。

「シャーローム・ラケーム」(平安が汝らのうちにあれ)

という言葉です。「シャーローム」というのは、平和とも平安とも訳す。この場合は平安です。

37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40 『斯く言いて手と足を示し給う』41 かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』42 かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。

こういう現実是我々には想像もつかない。イエスの復活体というのは凄いだ。インドにアバジというのがいてちよつと似たようなことをやった。霊界から時々出てくる。イエス・キリストは霊界に今ももちろん生きておられる。

●新天新地

キリストの再臨ということが言われている。世の終りには、審判の後でキリストは現れる。我々はその新天新地の天界を、我々の生涯をもつて待ち望んでいる。我々が天界に行く頃



はまだ本当の最後の日は多分来ないでしょう。明日来るかも知れない。分からないけれども
「神の国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われたように、キリストをいただいていると、神の国は今、現にある。そして今度は本当に、歴史の終りに新天地でもって神の国がくる。その時に本当に待ち望んで、キリストのために耐え忍んで、福音のために生きていた人は迎えられる。いい加減な者は入れない。これはミルトンが『パラダイス・ロスト』にも書いている。

ダンテの『神曲』は、皆さん、読みなさいよ。あれは素晴らしい詩だからね。私は世界最大の詩はダンテの『神曲』だと思っている。「地獄・煉獄・天国」の三界を描いた。内容的にはゲーテの『ファウスト』はダンテにはかなわない。

なにしろ、第一級のものを読みなさいよ。つまらないものがたくさん横行しているね。あんなものは相手にしない。テレビにもろくなものがない。日本はだめだな。日本は精神的に一番だめなのではないかな。学校の先生も全く情けないね、小学校から大学まで。

皆さんは、それぞれの自分の環境において、この福音のために戦って行ってくださいよ、戦いの内容は色々ですけれども。本当に福音のために戦わないと、天国に行こうと思っても、

「ちよつと待て」

と言われて、天国の扉を閉じられてしまうよ。

「でも、私は信じていました」

なんて言っても、

「だめだよ、ただ信じていたって。本当に伝道してないではないか」

なんてやられてしまう。

●遺りもの

元気に力強く大なる力に与^{あず}かって、そういういわゆる戦いならざる戦いをして行ってください。私に一言も言わなかった兄の小池政美は今ごろ天界で喜んでくださっているでしょう。私の兄弟姉妹、親戚の中で、福音に入^いったのは結局私一人になってしまった。

「ザ・ラスト・ローズ・オブ・サマー」(夏の名残^{なごり}のバラ)

のように遺^{のこ}りものだ。あなた方一人びとりが遺^{のこ}りものなんだ。「のこる」というのは「残」ではない。この「遺^{のこ}りもの」は「選ばれた人」ということです。福音のために選ばれた人です。被選挙人なんだ。「遺れる者」という言葉がイザヤ書に出ている。

「万軍のエホバわれらに少しの遺^{のこ}りをとどめ給うことなくば我等はソドムのご

とく又ゴモラに同じかりしならん。」(イザヤ1:9)

この「遺^{のこ}り」という字です。遺りの者とは選ばれた者と同じです。偉いから選ばれたのではない。福音を伝えるためにどんな人でもキリストは捕まえて、福音の伝道をなさせたもう。伝道の姿は色々です。そういうのが、あなた方一人びとりが「遺りの人」なんです。



●風の吹くがごとし

旧約聖書のエゼキエル書37章に、

「ここにエホバの手我に臨み、エホバ我をして霊にて出で行かしめ、谷の中に我を放き賜う。そこには骨充てり。彼その周囲に我をひきめぐりたまうに、谷の表には骨はなはだ多くあり、皆はなはだ枯れたり。彼われに言いたまひけるは、人の子よこれらの骨は生くるや。我言う、主エホバよ汝知りたまう。彼我に言いたもう、これらの骨に預言し之に言うべし、枯れたる骨よエホバの言を聞け。主エホバこれらの骨にかく言いたもう、視よ我汝らの中に氣息を入らしめて汝等を生かしめん。」

「氣息」はヘブライ語で「ルーアツハ」という。これは霊でもあり、風でもある。霊のくることを「風の吹くがごとし」とキリストが言われた。あれは本当は同じ字なんだ。

我筋を汝らの上に作り、肉を汝らの上に生ぜしめ、皮をもて汝らを蔽い、氣息を汝らの中に与えて汝らを生かしめん。汝ら我がエホバなるを知らん。

我命ぜられしごとく預言しけるが、我が預言する時に音あり。骨うごきて骨と骨あい連なる。我見しに筋その上に出できたり、肉生じ、皮上よりこれを蔽いしが、氣息その中にあらず。彼また我に言いたまいけるは、人の子よ氣息に預言せよ、人の子よ預言して氣息に言え。主エホバかく言いたもう、氣息よ汝四方の風より来り、この殺されし者等の上に呼吸てこれを生かしめよ。我命ぜられしごとく預言せしかば、氣息これに入りて皆生き、その足にて立ち、甚だ多くの群衆となれり。

斯て彼われに言いたもう、人の子よこれらの骨はイスラエルの全家なり。彼ら言う、我らの骨は枯れ我らの望みは竭く、我ら絶えはつるなりと。この故に預言して彼らに言え、主エホバかく言いたもう、わが民よ我汝等の墓を啓き、汝らをその墓より出できたらしめてイスラエルの地に至らしむべし。わが民よ我汝らの墓を開きて汝らをその墓より出できたらしむる時、汝らは我のエホバなるを知らん。我わが霊を汝らの中におきて汝らを生かしめ、汝らをその地に安んぜしめん。汝等すなわち我エホバがこれを言い之を為したることを知るにいたるべし。」（エゼキエル37・1～14）

神さまはそういう素晴らしい創造をする。このエゼキエル書37章の所はおもしろい。36章25節からもちよつと書いてある。エゼキエルというやつもおもしろいやつだ。

●遍照遍在

大事なのはいま読んだルカ伝24章のところですよ。復活のキリストがお魚を食べてしまった。キリストの復活体というのは我々の想像を絶するところの霊肉渾然たる存在です。大



変なものです。いやはや、大変なひとだよ、イエスというひとは。これは東西古今に例がない。完全に例外者です。

コリント前書15章20～28節に、

「然れど正しくキリストは死人の中より甦えり、眠りたる者の初穂となり給えり。それ人によりて死の来りし如く、死人の復活もまた人に由りて来れり。凡ての人、アダムに由りて死ぬるごとく、凡ての人、キリストに由りて生くべし。……最終の敵なる死もまた亡ぼされん。『神は万の物を彼の足の下に服^{したが}わせ給い』たればなり。万の物を彼に服させたりと宣^{のたま}給うときは、万の物を服させ給いし者のその中になきこと明らかなり。万の物かれに服^{したが}うときは、子も亦みずから万の物を己に服させ給いし者に服わん。これ神は万の物に於て万の事となり給わん為なり。」（コリント前15・20～28）

と、おもしろい言葉だね。神は遍在している。遍照遍在している。一切のものを照らす太陽みたいに遍照して、いたる所に遍在する。遍照遍在とはいいい言葉だな。いたるところを照らし、いたるところに存在している。

復活の記事は、このコリント前書15章、エゼキエル書37・1～14の他に、旧約では列王記略下4・32～37、列王記略下13・20～21にもあります。

「エリシヤここにおいて家に入りて視るに、子は死にておのれの臥床の上に臥してあれば、すなわち入り戸をとじて二人内においてエホバに祈り、而してエリシヤ上りて子の上に伏し、己が口をその口におのが目をその目に己が手をその手の上にあて、身をもてその子を掩いしに、子の身体ようやく温まり来る。かくしてエリシヤかえり来て、家の内に其処此処とあゆみおり、またのぼり身をもて子をおおいしに、子七度噓して目をひらきしかば、ゲハジを呼びて、かのシユナミ人をよべと言ひければ、すなわちこれと呼べり。彼入り来たりしかば、エリシヤなんじの子を取りゆけと言えり。かれすなわち入りてエリシヤの足下に伏し、地に身をかがめてその子を取りあげて出づ。」（列王記略下4・32～37）

「エリシヤ終に死にたれば、これを葬りしが、年の立ちかえるに及びてモアブの賊党国にいりきたれり。時に一箇の人を葬らんとする者ありしが、賊党を見たれば、その人をエリシヤの墓におし入れけるに、その人いりてエリシヤの骨にふるるや、生きかえりて起ちあがれり。」（列王記略下13・20～21）とある。おもしろいことが書いてあるね。

